私の留学体験記 第1回

世界に一歩近づいた

スクールオブアルバータバレエからサンフランシスコバレエスクールへ

湯浅紫苑（17歳）

三年前、私は初めてカナダのバレエサマースクールに参加しました。何もかもがはじめてしたので、最初はホームシックになりました。しかし、サマースクールはバレエ漬けの毎日でしたので、次第に楽しくてたまらなくなりました。サマースクールが終わってからは、カナダのことが頭から離れなくなり、留学をしたいと強く思うようになりました。翌年三月、私はアドミッション留学センターが実施するオーディション・ツアーに参加し、そして、マリ＆&ナンシ・キルゴール先生のスクールオブアルバータバレエに留学することを決めました。

留学の始まる二回目のサマースクール。私は興奮していっぱいでした。カナダのバレエスクールと中学校の新学期が始まり、英語漬けの毎日になりました。話の通じない、とても厳しい毎日でしたが、自分の好きなバレエを勉強するという一念で、ホストファミリー、バレエスクールの中学校の友人などと積極的に英語で話し、必死に英語を勉強しました。半年を過ぎた頃から先生や友人の言っていることがわかるようになり、その時はうれしくてしかたがありませんでした。また、ホームステーキも不安でいっぱいでしたが、ホストファミリーがまるで実の子供のように扱ってくれ、温かく見守ってくれました。日本を思い出して寂しくなった時、ホストマザーは私を強く抱きしめ、私を支えてくれた。英語もわからない私を、ホストドターたちは優しく接して、いろいろな楽しいことをしてくれました。私もホスト・ファミリーに何ができないかを考え、掃除をしたり、食器を洗ったり、夕飯作りを手伝ったりしました。こんなに優しいホストファミリーに恵まれた私はとても幸せでした。

バレエスクールではケッティのテストもありました。テストまでの限り間に振りを頭に叩き込み、緊張感の中、テストに臨みました。テストが終わると、先生が「頑張ったわね」と言って思いっきり抱きしめてくれたことを今でも覚えています。テストが終わり、次は学年末の発表会です。発表会の演目は、キルゴール先生ご夫妻の意向で数年年ぶりの「ピーター・ラビット」です。私は作者のビアトリックス・ポッター役となり、とても楽しく演じられました。

発表会が終わったその年の夏、私は日本に帰らずにカナダに残りました。そして、チケットをもらってサマー・スクールに参加しました。レッスンはとても楽しく、毎日ABRやロイヤル・バレエの異なるタイプの先生から新しいことを学びました。カナダで一年目を迎えた頃、私はこれまでコンクールに出場したことがなかったので、とても迷いがありましたが、とても勉強になるチャンスだと思ってエントリーしました。レッスンはとても楽しく、毎日ABRやロイヤル・バレエの異なるタイプの先生から新しいことを学びました。

カナダで一年目を迎えた頃、私はこれまでコンクールに出場したことがなかったので、とても迷いがありましたが、とても勉強になるチャンスだと思ってエントリーしました。レッスンはとてもエキサイティングでした。

二〇〇九年一月、サンフランシスコで行われたYAOPF予選に参加しました。予選ではトップ12人になることができ、ニューヨークの決選に出場することになりました。それを聞いた時は驚きのあまり、何も言うことができませんでした。キルゴール先生はその姿を見て強く抱きしめてくれました。四月、ニューヨークでの決選は、忙しい二週間でした。「〇〇のスタジオでレッスンを受けて下さい」などなど、事前に連絡もなく変更があるので、毎日確認をするのが大変でした。この決選では朝も食べるうどんとを学びました。もちろん最終ラウンドに出られなかったことはとても悔しくてしかたがありませんでしたが、このコンクールを通して何かを得た気がしました。

そして、今年の夏、サンフランシスコバレエスクールに参加しました。このサマースクールは事前に行われるオーディションまたはビデオ・オーディションで受かったらしか参加できないため、上手いすぎ集結していました。みんな意欲的に頑張っていて、自分から挑に行かないと先生は見ってくれません。バーのスポットは毎日のように取り合いでした。

ですが、ここでバレエを学んでよかったと思い、このサマースクールでのオーディションに挑戦し、合格しました。その時、サンフランシスコに行くことを一番に賛成してくれたのが、アルバータバレエのキルゴール先生ご夫妻でした。私はオーディションに受かったことを伝えると同時に、先生方との別れ、そしてもっと敬文を請いたいという寂しさもありました。本来の目的を達成するためにお世話になった方々へ感謝したいなるのではないかと思い、目標を高く持って次のステージに進みました。

サンフランシスコに行く前日、キルゴール先生ご夫妻から手紙とプレゼントをいただきました。そのプレゼントは、言葉に表すことのできないくらいすばらしいものでした。私はすぐに泣いてしまい、何も言えない私を先生は優しく抱きしめてくれました。私は先生たちにお礼を言い、常に強く抱きしめ、温かく見守っていただいたことについて手紙で思いを伝えました。

この二年間、いろいろな人が私を支えてくれました。そこから離れるのはとても寂しかったです。「新たな道のためには、別れは必然だ」と先生方がホストファミリーは私に言ってくれました。そして今、その言葉の意味がわかります。私がお世話になった方々すべてに感謝を込め、力の限り、心に響くバレエを身に付けられるように、これからも頑張って、努力したいと思います。

今、サンフランシスコバレエスクールに毎日通っています。寮生活なので、食事から洗濯、何から何までを全部やらなくといけません。でもこの寮にいるみんなはとっても優しく、毎日が楽しいです。そして、ここののレッスンは、カンパニーのリハーサルを見ること、有名な振付家にも会うことができます。私はそういう人たちに会えたのは感動いっぱいになれます。また、ここでバレエ留学を始めた頃は、バレエと強張の両立に悩みました。しかし、東京の品川にあるインターナショナル通信制高校のアントマーク・イングリッシュスクールで学ぶようになると、悩みは解消しました。この学校では、バレエを卒業生位科目にできるので、バレエに集中でき、バレエと勉強が両立できます。現在、勉強も楽しくやっています。これからも、現在、夢に少しでも近づけるように頑張ったいと思っています。「頑張ります！」

サンフランシスコバレエスクールにて

スクールオブアルバータバレエのキルゴール先生ご夫妻と

サンフランシスコバレエスクールにて

サンフランシスコバレエスクールの仲間たち